

Valentine's Day

天国と地獄ーバレンタイン・デーのほろ苦い思い出ー

●毎年1月中旬になると、菓子屋やデパートの店頭には、きらびやかな包装紙に彩られた様々な形のチョコレートがところ狭しと山積みされる。ああ、今年もバレンタイン・デーがやって来たのかと、多少憂鬱(ゆううつ)な気分になる。でも、生徒たちにとっては人生がひっくり返らんばかりの重大な関心事であるらしく、授業そっちのけでそわそわドキドキ、一日千秋の思いで待ちわびている。この日は基督教の殉教者を偲(しの)ぶ日に名を借りて、厚顔無恥な(?)女性たちが純情内気な世の男性たちをからかったり、脅したり、そして最近では滅多になくなったらしいが、恋心をうち明けたりする純情可憐な美風がまだ日本の一部に残っているらしい?!

●私にはバレンタイン・デーというと、忘れることができない苦い思い出がある。私は小さい頃から、好きな人に「好きです。つき合ってください」などということが、気障ったらしく思え、また、内気な性格も手伝って、言えない質(たち)だった。高校2年の時、隣のクラスの小杉N子さんという髪の長い生徒にほのかな思いを寄せていた。当時、バスケット部の親友であった中村S夫と高橋A男の2人に相談したところ、悪いことに中村も高橋も小杉さんが好きだという。「お前、小杉さんをやめろ!」「お前こそ、頼むから小杉さんを諦めてくれ…」とか、散々言い合いをした挙げ句に、「絶対、一人だけで抜け駆けはしない」という紳士協定を結び、一件落ち着いたはずだったのだが…。何てことであろう!我が目を疑った。あろうことか、ある日、魚野川河畔で、高橋と小杉さんがデートをしている光景を目撃してしまったのだ!その瞬間、すべてを悟った私は、以来高橋とは絶交して口もきいていない。無論、警備保障会社に勤務している中村との親交はいまだに続いているが…。私はこの苦い体験から、「内気は美德ではない。好きな人ができたら、後悔しないために、できるだけ速やかに、その人に心のうちを告白する」という誓いを立てた。

●大学に入学して間もなく、鈴木K枝さんというやはり髪の長い控えめな女性に惚れてしまった。苦悶の果てに、誓いを実践した。勿論、「OK!」という二つ返事もらったのは言うまでもない!大学3年のバレンタイン・デーに、『Jin』という名前の入った手編みのセーター(これはいまだに一度として着たことがなく、妻に内緒で、大切に隠し持っているのだが…)と『××××ー To Jin From Kakko ー』

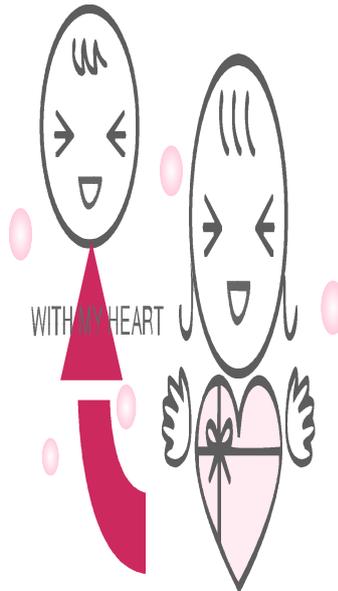
と震えるような白字で書かれたハート型のチョコレートもらった。デートが終わり、汚い四畳半の安アパートに戻っても、放心状態は収まらなかった。アパートにどうやって帰ってきたかさえ自分で分からなかった。この夜は一睡もせず、K枝さんが大好きな『カーペンターズ』の澄みきった曲を、ボリュームを最高に上げて聴いていた。堪えても堪えても、涙がボロボロと止めどなく流れてきて、無上の喜びにひたっていた。隣の住人、法政大学の岡S二さんなどは、「青木さんの様子がおかしい。



気が狂ったのではないか？」とマジに心配してくれて、管理人を連れて訪ねて来たものだった。私は今まで生きてきた人生の中で、あの時ほどの『無上の幸福感』は、後にも先にも一度として味わったことがない！



●しかし、その後が何ともまずかった。K枝さんからプレゼントされたチョコを後生大事に半年近くも壊れたような冷蔵庫の中にしまっておいて、とうとうカビを生やしてしまい、『××××× To Jin From Kakko』という永遠と思えた愛の言葉も跡形もなく崩れ去ってしまったのだ。そのためかどうか？結局、彼女とは紆余曲折の果て、結婚できなかつた…。私はいまだにK枝さんが好きで、時々あの日のことを夢に見る



ことがある。その後、バレンタイン・デーになる度に、妻や娘、時として生徒から（あなたはもてないからと、同情されて）『義理チョコ』なるものをいただくが、なぜか惨めな気分になるばかりである。ある金曜日の夜、単身先から帰宅した折、妻が見覚えのある毛糸のダブダブの靴下を履いていたのが、目に止まった。問い質したら、二階のタンスの奥に古ぼけたセーターがあったから、毛糸にほどいて靴下にしたのだという…。それ以来、いつ終わるとも知れない、私と妻の冷戦が始まった…。「あなたが踏みつけている毛糸の靴下は、K枝さんとの甘く切ない青春時代の思い出なのに…、大切なバレンタイン・デーの思い出なのに…」私は妻に聞こえないよう、何度も何度も心の内でつぶやいた…。こうしてまた私の生きる張り合いが一つ失われていった…祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり…（単身赴任中の校長日記より）。

嗚呼（ああ）！こんな教師になれたら…、こんな人になれたら…



ただいるだけで

あなたがそこに
ただいるだけで
その場の空気が
あかるくなる

あなたがそこに
ただいるだけで
みんなのこころが
やすらぐ

そんな
あなたにわたしも
なりたい…

相田みつを作



先日、教師としての生き方に悩んでいる若い教員から、「青木先生はどんな教師を目指しているのですか…？」と深刻に尋ねられ、私の好きなこの相田みつをさんの詩を紹介した。こんな人になれたらいいのにとと思う。

私の所属する研修サークルの仲間が、ある研修会の折に、若い頃に仕えていた敬愛する校長の話として語ってくれた一節が心に残る。教職人生を高級ブランディー＝V S O Pになぞらえて…『20代はバイタリティー（Vitality）、若さを武器に突き進みなさい。30代はスペシャリティー（Speciality）、誰にも負けない自分の専門性を更に高めなさい。40代はオリジナリティー（Originality）、自分なりの個性や独創性を大切にして、後輩の良き手本となりなさい。そして50代はパーソナリティー（Personality）、これまで培ってきた人格や識見を多くの人たちのために役立てていきなさい…』と。

さて、自分はどうかと自身を振り返った時、何とも言えない惨めな、悲惨な、取り返しのつかない気持ちになる。もう少し若い時にこの話を聞きたかったと…。嗚呼（ああ）、後悔先に立たず…



